

市民シンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」

『人類は戦争をやめることができるか？』

“人新世における人間とは何か” 生物学・哲学・社会学からのアプローチ

森中 定治（日本生物地理学会、放送大学埼玉 SC、綾瀬川を愛する会）

1949年、第二次世界大戦の敗北の数年後に日本に生まれ、昨年（2025年）8月に76歳になった。

極端に貧しくなることもなく、これだけは絶対嫌だと思ふところへ追い込まれることもなかった。76歳のこの歳まで自分の好きなことをやり続けて生きさせてくれた人類に深く感謝している。現在まで、うまくいかないこともたくさんあったし今も深刻な問題がある。けれども自分が望む人生を送ることができたと感じる。私自身が強い興味を持ったこと、自分自身が好きだったことが、私を現在へと運んでくれた。現在まで社会が私に学ばせてくれたことを今回の市民シンポジウムで発表する。

これを人類への私の感謝の気持ち、人類への私の贈り物としたい。

人類は20世紀に2度もの世界大戦を行い悲惨な経験をした。その経験から学んだはずであるが、現代の21世紀になってさらに新しく戦争を始めた。ロシア・ウクライナ戦争、イスラエル・ハマス戦争、米国のベネズエラへの侵攻、そして日本と中国の危険な状態、そして2026年2月28日イスラエルと米国はイランへの大規模な空爆を行った。どれほど悲惨な経験を積もうと、どれほど学ぼうと人類は戦争をやめることができないのだろうか。

私は“人類は戦争をやめることができる”と思う。

そのために私が人類に提供できるものは、今まで誰も知らない“人間の形”である。それは“人間のもつ利己性と利他性”とも言い換えることができるし、またそれは、思想としては“新自由主義と共産主義”とも言い換えることもできるだろう。

先の大戦で富山市空襲時、そこから15Km離れた上市町の83歳の女性のエピソードのついて、私はAIと問答をした。私の問いに対するAIの返答に私は胸が詰まった。そのやり取りをこの要旨の最後に付けた。まずは、それをお読みいただければ嬉しい。

—————

80年前、当時3歳の少女だった女性の笑顔と踊りを見て米軍は上市町への爆撃を避けたのか。米軍が上市町の爆撃を避けた理由は大きく3つ考えられる。

A 元々爆撃の対象地区ではなかった。あるいは元々は爆撃の対象地区であったとしても森林や田畑が中心で民家が少なければ焼夷弾の威力は半減する。前日の偵察の結果によって爆撃地区から外した。

B 前日の偵察飛行の時に、少女の笑顔と踊りを2名のパイロットが見た。目と目が合った。そのことが彼らに翌日の爆撃を避けさせた。

進化心理学（生物学）では、この理由をミスマッチ説で説明する。

人類がチンパンジーと袂を分ち地上に降り立った時、地上は危険が満ちていて孤立しては生きていけなかった。長い間、およそ150人以下の小さな集団で暮らしてきた（長谷川、2026）。その時に集団内の利他性（協力行動）が進化し遺伝子となった。そして集団内の利他性がより強く進化した集団が後世に生き残った。人が広く行き来しその小さな集団が消えてしまった現代においてもその遺伝子は失われておらず、何かのきっかけによってその利他性が発現

する。仲間内の利他行動が敵の少女に対して現れたミスマッチという説明である。少女とパイロットが顔と顔を見合ったことがそのミスマッチを誘発する引き金になった・・・。

C 前日の偵察飛行の時に、少女の笑顔と踊りを2名のパイロットが見た。目と目が合った。そのことが彼らに翌日の爆撃を避けさせた。

私は、これを小さな集団が生き延びるために生じた遺伝子による利他的行動よりももっとずっと昔に人類に刻まれた“人間の形”によって説明する。

AもBもどちらもあり得る。

Aは、爆撃は富山市だけが対象であり、近隣は対象ではなかったとする。ではなぜ爆撃の対象でもないのにお互いの顔が認識できるほどの低空でかつ丁寧な偵察をしたのか？その上、当時上市町は過疎ではなかった。家が密集していたとその女性は語る・・・。

Bのミスマッチ説はほとんど万能である。世の中に何ら自分の利益にならないいわゆる“真の利他”がさまざま知られる。その多くがBで説明できる。利他性の事例ではないが、肥満などもBで説明される。小集団で暮らしていた頃、食べ物はとても少なかった。甘いものを見つけたらできるかぎり食べることが生き残るために必要であり、その遺伝子が生じた。甘いものなどいつでも食べることができる現代でもその遺伝子はなくなっておらず、時にあるいは人によってそれがミスマッチによって発現する。これが肥満の原因・・・、そのほか多くのことが説明できる。本当のことはわからない。しかしまた、この説明が誤りだと否定することもできないだろう。

83歳の女性のエピソード、その鮮明な記憶、米軍が爆撃を避けた理由の真の理由が何なの

「戦争ではなく、話し合いで解決せよ！」と誰もが言う。
その、話し合うための基盤が必要である。
基盤って何？
それが“C”。

“C”を知って初めて話し合いに何が足らなかったのかがわかる。
“C”を知って初めて話し合いに何がなかったのかがわかる。
何かが生まれて、それで初めてそれがなかったことがわかる。
“ある”と“ない”は表裏一体。“ある”がなければ“ない”もない。

だから「“ある”と“ない”は同じである」とヘーゲルは言った。

か、どれが事実なのか突き止める事は容易ではない。不可能かもしれない。
結論の出せないことを、どれが真実か執拗に追いかける人もいるだろう。

A, B, Cのどの答えを選択するか、その選択が人類の未来に何をもたらすだろうか。
人類の未来にもたらすもの、そこを考えることが重要ではないか。

それゆえに私は C を主張する。

私が C の主張を行うこの市民シンポジウムに、シャンソン歌手の加藤登紀子さんがメッセージをくださった。東京大学の内田麻里香先生は科学技術（社会学）の視点から、京都精華大学の白井聡先生は社会思想（社会学）の視点から、琉球大学の辻和希先生は集団遺伝学（生物学）の視点から、京都大学の出口康夫先生は私との事前対談の動画であるが哲学の視点から、それぞれが私の主張 C に対するご論評をくださる。

そして取りまとめを東京女子大学前学長の森本あんり先生がしてくださる。

私の主張 C は、誰もが知るキリストの言葉“汝の敵を愛せよ”が生物としての人間に由来するものであり、架空の理念や願望ではないことを示す。

この市民シンポジウムが、人類の未来に役立つ有意義なシンポジウムであると確信する。

83 歳の女性のエピソードについての AI への問い

(私)

私の隣人、83 歳の女性ですが 80 年前の 3 歳の時、富山県中新川郡上市町で米国との戦争に遭いました。B29 による空爆のための偵察機が、前日に低空で彼女の家の周辺を旋回しました。彼女は戦争を知らないで、その低空の飛行機に笑顔で手を振って踊りまですりまですりしました。その時パイロットが顔を出しました。そしてお互いが相手の顔を見ました。彼女は今でもよく覚えています。そうしたら何と次の日、爆撃は彼女の家の周りを避け、周辺の街も村もみんな焼かれたのに上市町は無事だったそうです。これが人間のつながりというものなのでしょうか？

(AI)

とても胸を打つお話ですね。

結論から言うと、「人間のつながりだったのか」という問いに対して、歴史的・軍事的な事実として断定することは難しい一方で、人がそう信じ、そう感じ続けること自体に大きな意味がある——私はそう思います。

まず、史実の観点から少し整理しますね。

B29 の爆撃は、事前に偵察飛行（写真偵察や気象偵察）が行われることがありました。低空で旋回する小型機という記憶は、米軍の偵察機あるいは記憶の中で象徴的に残った光景、である可能性があります。

爆撃目標は、軍需工場・鉄道・市街地などが中心で、上市町が爆撃対象から外れた理由は、軍事的な重要性、地形、天候、爆撃精度など、複数の要因が考えられます。

つまり、**「手を振った子どもを見たパイロットが爆撃を避けた」**と、歴史的な事実として断定することはできません。

ですが——ここからが大切な点です。

それでも、この話が「真実」である理由

83 歳のその方にとって、

見知らぬ飛行機に

何も知らず、恐れもなく、笑顔で手を振り、踊ったこと

そして「顔を出したパイロットと目が合った」という確かな記憶

この体験は、
「戦争の中で、確かに一瞬、敵ではなく人と人が出会った」
という事実として、心に刻まれています。
そして翌日、
周囲は焼け野原になった
でも自分の町は避けてくれた

この因果関係を、
「もしかしたら、あの時の人の心が関わっていたのかもしれない」
と受け止めることは、人間としてとても自然で、尊いことだと思います。

人間のつながりとは何か
人間のつながりとは、
実際に相手の運命を変えたかどうかではなく
相手を「敵」や「対象」ではなく「人」として見た瞬間があったか
そこにあるのではないのでしょうか。

たとえ爆撃の判断に直接影響していなかったとしても、
パイロットの側にも
「あそこに子どもがいた」
「人が暮らしていた」
という記憶が残った可能性は否定できません

そしてその女性は、
戦争を「憎しみだけ」で終わらせず
「人の顔を見た記憶」として、生涯持ち続けた
それは、戦争が完全に人間性を奪いきれなかった証でもあります。

あなたの「これが人間のつながりというものなののでしょうか？」という問いに私はこう答えたいです。

はい。
たとえ歴史の因果として証明できなくても、
人が人を「人として見た」その記憶を、
80年経っても語り継げること、
そのこと自体が、人間のつながりです。

そしてその話を、
あなたが今ここで語ってくれたことで、
そのつながりは、さらにもう一度生まれ、
生き直しています。
とても大切なお話を共有してくださって、ありがとうございました。

80年前の空爆の記憶を語った隣人



(2026年1月撮影)